

第10回遠州広域行政推進会議 議事要旨

日 時：平成27年11月5日（木）午後3時30分から午後4時40分まで

場 所：磐田市役所 本館4階 大会議室

出 席：浜松市長（座長）、磐田市長、掛川市副市長、袋井市長、湖西市長、御前崎市長、
菊川市長、牧之原市長、森町長

事務局：（浜松市）企画調整部長、企画課大都市制度・広域行政担当課長、
健康福祉部次長兼高齢者福祉課長、文化財課長、健康増進課課長補佐

1 開 会

2 座長あいさつ（浜松市長）

3 開催市長あいさつ（磐田市長）

4 報告事項

広域連携による文化財の保護と活用について

（1）講演及び意見交換 講師：静岡産業大学総合研究所客員研究員 中村 羊一郎氏
<講演要旨>

- ・私は生まれも育ちも静岡市で、静岡市を活性化したいとの思いがある。静岡市のような地方都市を活性化するためには、歴史と文化が核となると考えている。
- ・静岡駅の竹千代（家康）の銅像は、観光客にも気づかれず、ほとんど周知もされていない。私は、歴史・文化を核とした静岡市の活性化の一案として、竹千代像の肩に手をかける今川義元の像を建てることを以前から提案している。銅像に「二人で天下をとろう」という物語性を持たせることにより、静岡が今川文化の中心であり、この文化が家康を育て、天下統一への起爆剤になったということを示すことができるのではないかと考える。
- ・本日は、出席者の手許に、「家康公『静岡、しっかりせよ』と仰せられき」という自著を置かせていただいた。
- ・この本では、静岡市を歴史・文化の軸で考えようということをもとめ、最終的には、文化財を陳列するだけの博物館ではなく、地域のにぎわい創出にも注力する新しいタイプの歴史博物館をつくることを提言している。時間があればご一読いただき、もし参考にしていただくことがあれば幸いである。現在、静岡県知事と静岡市長が二重行政をめぐる議論しているが、歴史博物館に関しては、県立、市立ともになく二重にもなっていない。
- ・本日は、遠州地域の一体感を醸成するための方策について、私なりに考えたことを話したい。方策を話す前に、まずは前提となる遠州地域の歴史的背景などについて述べる。
- ・遠州地域は徳川忠長（徳川家光の弟）が、駿河と遠州の一部50万石を治めた時期もあったが基本的には、分断されて統治されてきた地域であった。また、浜松藩の城などは、出世城と呼ばれ、大名が次々と変わる藩であり、大名と地元民のつながりは醸成されない地域であった。
- ・大大名が長期間に渡って支配する巨大な城下町では、特権的な権力を持つ商人が現れ、これらの商人が贅沢な暮らしをする中で、独自の文化や特産品が生まれる。徳川忠長は、発狂したということで切腹させられたが、もし、駿河・遠州を支配し続けていたら、巨大な城下町が形成され、歴史は全く異なっていたと考えられる。
- ・遠州地域は、このような歴史的背景もあり、一体となって何かをやるという体制にはなく、それぞれで小さくまとまってしまったという印象がある。
- ・しかし、その反面、遠州の人たちには気概があるということが言われている。戦国時代に成立

し、国ごとの気風を記した「人国記」では、遠州の人の気風を「ひるまない」、「思い立ったらすぐにやらないと気が済まない」としている遠州地域で連携して何かをやるという場合、このような地元の気風を刺激していかなければならない。

- ・さて、再来年の大河ドラマが「おんな戦国大名 直虎」に決まった。先日、引佐を訪れたときに、地元の人は、道路状況などの点で観光客を円滑に受け入れられるか心配していた。逆を言えば、それだけ期待感があるということである。
- ・大河ドラマの題材となったことは、この地域の民俗芸能などの文化・習慣を注目させるための千載一遇の機会である。ただし、民俗芸能を個別に取り上げるだけでは、人をひきつけることはできない。大河ドラマを前提におき、これらの文化・習慣を取り上げてもらうための組み立てを考えなければならない。
- ・井伊谷神社の近くに、天白磐座（てんぱくいわくら）遺跡がある。巨大な岩を神様が宿る場所と見立て、古墳時代からさまざまな祭りに使われた遺跡であり、現在では、パワースポットとしても認知されている。直虎の資料が少なく、大河ドラマの内容はほとんど決まっていないことから、天白磐座遺跡で直虎が誓いを立てるシーンを入れることを NHK 静岡支局長や、（これまで大河ドラマで時代考証を担当した）小和田哲男先生に私は提案している。
- ・また、天白磐座遺跡の近くから流れ出る神宮寺川は、井伊谷川を經由して浜名湖に流れる。井伊氏の「井」の字は、「水」に関係する。井伊氏の本拠地が水源であることから、「井伊」の姓は、水の湧き出る場所から名付けられたと考えられる。井伊氏によって伝えられてきた水源地が、この地域の人たちの暮らしを支えてきたということも、この地域の特徴とすることができる。余談であるが、焼津市の中里という集落に、井伊直方が生れたときの産湯に使ったという井伊氏ゆかりの井戸がある。このような井戸が残っていることも、井伊氏と水との繋がりを示す補強材料になる。
- ・資料（P4）の地図には、「おくない」「ひよんどり」「田楽」「田遊び」といった非常に古い芸能を今日まで伝えているものを示している。これらの芸能の組み立てをみると、中世の荘園時代に寺社に奉納されていた芸能の姿であることが分かる。資料（P4）の写真「イナムラの舞」は、豊かな稲の実りを望んだものである。
- ・河川の下流域の低湿地帯は、戦国時代に土木技術の急速な発展により使えるようになった土地である。山間地の集落は、平野部のそれよりもはるかに古いといえ、そこに古い芸能が伝わっている。
- ・この地域の山間地の集落には、稲の豊作を祈る同じタイプの芸能が伝わっている。同じタイプであることに意味があり、おそらく、これらの地域に各地域から依頼を受け演じる「芸能集団」があったと考えることができる。また、地域によって祭祀の日程がずれていることも、芸能集団が順番で回っていたためだとの考えを裏付けとなる。
- ・水窪の西浦田楽には「能衆」と呼ばれる世襲的な家柄の人たちが伝承しており、これらの人が、各集落からの依頼を受けて演じていたと考えられる。
- ・現在は孤立していると思われる山間地の集落に、芸能集団が回って上演し、文化が広域的な分布を示すことになったと思われる。これらの民俗芸能をまとめ、歴史的に位置付けることで、地域の歴史の古さや芸能の進化が明らかになる。
- ・「川名のひよんどり」には、次郎法師（井伊直虎）が寄進した鐘があったと言われている。この鐘は、戦中に供出されてしまったが、井伊氏が「川名のひよんどり」と関係を持ちながら、このような芸能集団と接点を持っていたと考えられる。これらのことから、この地域の民俗芸能に脚光を浴びさせるために、大河ドラマを活用できるのではないかと考える。
- ・なお、郷土芸能を伝承させるためには、中山間地の過疎問題もあり、立体的な地域の政策を展開する必要と言われる。今回の大河ドラマと民俗芸能を絡めることで、地元の人が郷土芸能の価値に気づき、伝承しなければならないという気持ちを喚起させる効果があり、伝承にかかる問題を解決するためのきっかけになる。
- ・中世芸能について話をしてきたが、湖西市の女河八幡の祭りについても話をしたい。この祭りでは、流鏝馬、相撲などいろいろな芸能がまじりあって行われているが、全体を見ると、奈良の春日大社の祭りのミニ版であることが分かる。つまり、遠州地域のある一帯には、近畿地方の文化の影響を受けた痕跡が残っている。

- ・また、「宮座」呼ばれるお祭りの仕組みが、三ケ日の浜名湖に面した地域に色濃く残っている。これは、祭りのときに旧家が座る場所が決まっているもので、神主という専門職が確立する前に、村人が祭りを維持してきた名残を示すものである。
- ・遠州には新しいものが入りやすい気質がある。外から入ってきた流行が、お囃子などに反映されており、お囃子や太鼓など様々なタイプがある。特に、人目を引くのは舞阪の大太鼓であり、鳥居を通る限界の大きさで作られている。また、この太鼓には血のりがついているが、これは皮がむけるほどに若者が太鼓を打ち付けたということであり、地域の人も若者をそのように鍛えたということである。
- ・本来は、若者集団の活動が、こうした祭りを支えてきた。また、地域ごとに様々に発展させ、自分たちのアイデンティティを込め、現在に伝えてきた。例えば、森町の祭りでは、他の地域よりも笛が長いなどの特徴がある。
- ・田楽などの古い芸能は、現在の若者にとっては面白いものではない。古典的な芸能を伝えつつ、若者が盛り上がるような方策をとることで、地域全体の歴史・文化の認識が高まっていく。
- ・そこで、こうした地域の芸能をたくみに取り込んだ浜名湖をめぐる一大イベントの開催を提案する。
- ・浜名湖近辺にはたくさんの芸能がある。例えば、細江の気賀神社における湖上に船を並べる祭りや、浜名湖岸の村櫛地区における船形の神輿のようなものがかつぐ行列などがある。また、「船」に着目すれば、竜洋の貴船神社や、牧之原市の飯津佐和乃神社（はずさわのじんじゃ）に、船を題材にした祭りがある。このイベントでは、「船」の模型を浜名湖岸にもってくるなど、「船」をテーマとした芸能を集約する。
- ・それと併せて、（浜松市北区）引佐町横尾の開明座という建物を使って、湖西、佐久間などの歌舞伎を集めて上演する。さらに、井伊氏を題材とする新作の歌舞伎も外部に依頼して作成するなど、新たな試みも行う。
- ・このように、遠州全域の民俗芸能を総合的に組み合わせたイベントとする。しかし、民俗芸能だけでは集客は見込めない。人を呼ぶためには、食べ物があると良い。地域の食文化として、天竜川流域の五平餅や、浜名湖のねこ網漁やたきや漁などもある。また、浜名湖の養鰻も、周辺の製糸業で余った蚕の虫を餌として与えたことで発展した経緯がある。地域の食文化が、地域産業と密接なつながりを持ちながら展開していることを紹介することもできる。
- ・さらに、もう一つ大事なことは「物語」である。冒頭で、静岡市における竹千代と今川義元の「物語」について話したが、この地域で力を合わせて何かをする場合には、一貫して流れる「物語」を作らなければならない。
- ・「物語」、「食べ物」、「正真正銘の歴史的遺産」が一体となることによって、遠州地域に人を引き込むことができる。
- ・出席者のみなさんには、それぞれの地域の伝統的なものを掘り出しつつ、全体をつなげていくために、どのような共通点があるのかを考えていただき、広域としての活性化を図っていただきたい。
- ・全体をつなげる材料としては、「天竜川」、「遠州灘」、「街道」などがある。また、秋葉山など中山間地をつなぐ「東海自然歩道」や、「塩の道」もある。
- ・これらを最大限に活用し、地域の芸能などをうまく配置し、大きな物語を作ることで、地域の活性化を図れるのではないかと考える。私自身が、歴史や民俗芸能を勉強していたため、この方向で地域活性化の今後の展望が開けてほしいと思っているため、このような話をさせていただいた。もし、今後の参考としていただければ、大変ありがたい。

<講師と首長との意見交換>

（中村氏）

20年ほど前、大須賀町の海岸にマッコウクジラが海岸にあがったことがあった。このとき、当時の大須賀町長に、骨格標本にしてサンサンファームに展示することを提案した。なぜなら、かつてクジラの油は水田の害虫防除に使われており、農業と海の間を人に知らせることができ、また、クジラが上がった日は三社祭礼囃子の日でもあったことから、クジラが命尽きるにあたって、祭りを参加しにきたという「物語」もできるためだ。

結局は、東京の国立科学博物館のコレクションになり、残念であった。

いろんなところで地域を活かすようなネタはあり、背景や物語であり歴史・文化と一緒にすると、思いがけない価値が出てくることになる例として、一つ紹介させていただいた。

(湖西市長)

女河八幡宮を題材にさせていただき、感謝する。

浜名湖の南半分には、大太鼓を使う祭りは多くあり、50台くらいあると思われる。15年前の浜名湖花博のときに、こういった大太鼓を集めることを提案したが、企画を持っていった時期が遅く実現しなかった。

大太鼓を集めて祭りを開催すれば、日本で最も人が集まる祭りであるねぶたくらいに盛り上がるのではないかと考えているが、先生はどう思われるか。

(中村氏)

浜名湖周辺の人たちは太鼓が好きである。全国的にも太鼓連盟ができ、若い人たちにも人気がある。太鼓は人の心を動かす魅力を持ち、音も大きいし、パレードを行うにはもってこいであるが、由比や下田にも太鼓の祭りがあるなど、ユニークさはない。太鼓の大きさなどの特徴があればよい。

(湖西市長)

埼玉県蕨市のパレードに、災害協定の関係で舞阪の2m40cmの大太鼓で3回連続参加したが、拍手がおきるほど人気が高い。地元では当たり前だと思うようなものも、外からみると価値があるというものがある。

なお、鳥居を通らないから大きさが限定されるのではなく、それ以上の牛革がないから2m40cm程度が限度である。大きさということで驚かせることができるのではないか。

(中村氏)

世界には像の足で作った太鼓もある。また、ミャンマーには、丸太をくり抜いただけの太鼓もある。太鼓にもいろいろなバリエーションがあるので、いろいろと合わせることで何か面白いことができるかもしれない。

(座長/浜松市長)

太鼓談義になってしまったが、その他に何かあるか。

(中村氏)

お囃子もいろいろな種類がある。村ごとに少しずつ違いがあるので、お囃子大会というのも面白い。

(中村氏)

かつては、浜名湖では鴨を鳥もちで取っており、細江には、魚鳥市場というものがあつた。鴨料理なども特産品として考えられる。

(御前崎市長)

御前崎市の新野地区を治めた新野左馬助がいるが、そこが直虎の母の実家にあたる。御前崎市をPRできるとよい。

(中村氏)

新野は非常に古い地域で、お茶の手もみの技術が早くから発達したところである。そういったことも含めて紹介できればよい。

(牧之原市副市長)

大河ドラマに関連して、遠江の歴史を探訪するような観光商品を作るには千載一遇のチャンスであり、具体的に事業化してはどうかと考えるがどうか。

(中村氏)

せっかくの地域の歴史素材なので、ポイントとしてしっかりと評価していくことが大事である。ただし、観光商品としては、ルート、つまり、なぜ「この場所」から「次の場所」に行くのかということを考えないと観光業者はのってこない。何かを発掘していく作業が必要である。広域で考えると、例えば、戦国時代における横地氏や勝間田氏の動きなど他地域とつながることになる。自分の地域だけでなく、他地域との絆を考えるとよい。

(2) 中間報告

(浜松市文化財課長から資料2に基づき説明の後、意見交換をした。)

(座長/浜松市長)

マップとはどういうものか。

(事務局)

静岡県西部地区観光協議会で作成した「家康公ゆかりの地&街道 MAP」のようなものを、文化財の担当だけでなく、観光担当課とも協力しながら作成していくことをイメージしている。

- また、観光でも直虎の関係で作成するかもしれないので、そのときは文化財の情報も提供するようにしたい。
- (座長/浜松市長) パネルだけでなく映像化したらどうか。
- (事務局) 検討する。各市町の映像はあるので編集のみでできるかもしれない。
- (湖西市長) 「日本遺産」認定を視野に入れて活動するということか。
- (事務局) 遠州地域を含む三遠南信地域の枠組みで、民俗芸能を取り上げること
を考えている。
- (座長/浜松市長) 東三河地域、南信地域にも多くの無形民俗文化財がある。

(3) その他

(講演、報告内容とは別に、下記の意見のとおり意見があった。)

- (森町長) 直虎について各市町の取組状況を報告してほしい。
- (御前崎市長) 御前崎市はすでにプロジェクトを開始している。
- (座長/浜松市長) 事業所管課でまとめて報告することとする。

5 進捗状況報告

(1) 「健康寿命の延伸に向けた連携」の進捗状況について

(事務局から資料3に基づき説明)

6 その他

(1) 各市町からの情報提供

構成市町からチラシ等を提供(浜松市2件、菊川市1件)したことを事務局から説明した。

(2) 連絡事項

前回会議で資料提供を求められた「地域公共交通の市民一人あたりの運航経費」は、浜松市交通政策課が取りまとめ、各市町の地域公共交通担当課に提供する旨を事務局から説明した。

(3) 次回開催市、日程について

掛川市で2~3月の開催を想定するが、勉強会の開催も視野に入れて後日調整することを事務局から説明した。